

令和7年度

鹿児島県の教育

4・5月号



巻頭言



「戦後八十年」によせて

一般財団法人鹿児島県校長会館理事長
県連合校長協会高等学校校長会 黒 木 誠

鹿児島県立鶴丸高等学校校長
黒 木 誠

県連合校長協会は、今年度、百二十人の新会員を迎え、小学校長部会長に永田孝哉（山下小）校長、中学校部会長に森園守（明和中）校長、特別支援学校校長部会長に堀之内恵司（鹿児島特別支援学校）校長、そして、高等学校部会長を兼ねる私の新たな体制でスタートします。

会員数は小学校四百五十九人、中学校八百十二人、高等学校九十人、特別支援学校十六人の合計七百四十七人です。全国でも珍しい四校種校長会の連合体という特性を生かしながら、当面する様々な教育課題の解決に向けて取り組んでまいりたいと思います。会員の皆様の積極的な取組と相互の連携・協力をお願いします。

さて、私が勤務する鶴丸高等学校には、「鶴丸は勉強するところである」という言葉が受け継がれています。昭和二十五年の入学式後の新入生と上級生との対面式において、当時の生徒会長が、新入生に対して語った言葉だと言われているのですが、この言葉に込められた思いを考える上で、当時の時代背景を知っておく必要があります。

今年は、太平洋戦争が終結した昭和二十年からちょうど八十年を迎える節目の年になります。終戦後、社会の様々な制度が変わっていく中で、戦前の五年課程の旧制中学校は、新しい学制のもと、三年課程の高等学校へと変わっていきました。本校は、昭和二十四

年に旧制鹿児島一中と旧制鹿児島一高女が統合する形で発足した学校になります。先ほどの「鶴丸は…」の言葉を残した生徒会長が所属する昭和二十五年当時の高校三年生は、その五年前の昭和二十年、終戦の年に旧制一中の一年生として学生時代を過ごした学年です。昭和二十年は、その年の三月以降、鹿児島市内においても激しい空襲が繰り返され、六月十七日の空襲では本校の校舎も焼失しています。また、この時期の旧制一中の生徒たちは、県内外の工場に動員されて労働に従事しているという記録も残っていますので、学生が学校に来て勉強する、学校生活を送るという当たり前のことがなかなかできない状況だったと思われます。

戦争が終わり、新しい鶴丸高校が誕生したときに、当時の生徒たちは自分たちが高校で学んでいる、学ばせてもらっているということに対して感謝の気持ちを感じていたのだと思います。そして、一生懸命に学ぶことによって、戦争で疲弊した日本の国を、私たち若者の力で、新しいよりよい国にしていきたいという大きな志があったのだらうと思います。

当時の生徒会長の言葉には、そのような思いが込められていたのだと思います。勉強ができることこそは、自由で平和な時代の証。戦後八十年の節目の年に私たちが「学校で学ぶ」ということの意義を再考してみたいものです。

* おもな内容 *

巻頭言	1	ある日の校長講話	13
提言	2	読書案内	14
退任にあたって	4	一般財団法人校長会館だより	16
新任の抱負	9	編集後記	16

令和7(2025)年 4・5月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

表紙絵(桜島の絵) 4・5月号～9月号 前川内北中学校 感王寺 等
題字(鹿児島の教育) 4・5月号～2・3月号 星峯西小学校 永里 智広



本物を見極める資質・能力の育成

中山小(市) 中村 武 司

一 はじめに

「攻殻機動隊」という作品をご存じだろうか。士郎正宗氏による漫画が原作だが、アニメ化、さらにはハリウッドによる実写映画化もされた作品である。二一世紀の近未来が舞台で、脳の神経ネットに素子(デバイス)を直接接続する技術が発展普及していることから、インターネット内の情報やデータを脳に直接アクセスできる世界である。PCを利用しないため便利ではあるが、脳がハッキングを受けたり、ウイルスに汚染されたりするなどで、仮想世界を現実と捉えてしまうこともある。「攻殻機動隊」は架空の話だが、似たようなことが今話題になってはいないだろうか。生成AI技術の発展によりディープフェイクが横行するなど、事実と異なるニュースや映像がネット内にあふれており、本物かどうか見分けにくくなっている。このような世界へ変貌しようとしている今、これからの子供たちにとって真に必要な資質や能力とは何か、考えてみたい。

二 子供が身に付けるべき資質や能力とは

子供一人に一台のタブレットが渡され、容

易に多くの情報を得られるようになったことから、子供が身に付ける資質・能力は、以下に示すようなものではないかと考える。

(一) 情報収集能力

インターネットだけでなく書物やマスメディアなど、多様な媒体から情報を集める能力が求められる。また、自分自身が現場へ行き、直接見聞きして情報を集めることも大切にできなければいけないと考える。

(二) 情報分析能力

集めた複数の情報を多様な観点で分析し、自分なりの考えを構築できるようにすることが大切であると考える。

(三) 事実を見極める能力

集めた情報の真偽を確認できる能力が必要である。情報の出所がどこか、同じ内容の情報が複数のマスメディアから出ているかなど、確認できるようにすることが大切であると考える。

(四) コミュニケーション能力

独りよがりの考えに陥らないためにも、他者と積極的にコミュニケーションができる能力が必要である。

三 学校ができることは

授業や係・委員会活動といった学校教育の日常的な活動の中で、事実や正しい情報を見極める資質・能力を育てるために、どのような指導が大切か提案したい。

(一) 正確な情報収集の仕方を身に付けさせる
タブレットなどで情報を集める際、必ずその出典元・発信元がどこなのかまで調べさせる。また、自分自身でデータを収集・分析する学習も積極的に取り組ませる必要があると考える。

(二) 正解のない問いに向き合わせる
他者に教えてもらう学習だけではなく、正解のない問いに向き合い、自分なりの結論を導き出させる学習を設定する必要がある。

(三) 体験・実感を伴う活動に取り組ませる
欲しい情報や知識が容易に手に入るようになったが、五感を通した学びによってより深く理解することもある。その大切さを理解させる必要がある。

(四) 情報モラルを育成する
社会という共同体の中で、情報を発信・受信する際、人としてどう対応すべきか、自ら判断し、行動できる態度を育てる指導が必要である。

四 おわりに

AI技術の進歩は加速するばかりである。未来を見据えた教育が充実されることを願ってやまない。



生徒や教職員の笑顔を守るために

皇徳寺中(市) 山下 久美子

「バランス感覚が仕事をしていく上でとても大切だと思う。しかし、そんなに簡単に身に付くものでもないよね。」私がまだ三十代の頃に、教職員ではない一般企業に勤める友人が残してくれた言葉。「残した」と言うのは、その友人が若くして亡くなってしまったからだ。

ある時、仕事の悩みを吐露した私に、「それは、生徒たちのためになることです。それとも先生方の都合なのですか。」と問われた。「自分なら、まずお客様のためになるのかと考える。お客様のためになるのであれば全力を尽くすだけです。」と言われてハツとした。その言葉を聞いた時に、答えは一つであることに気が付いた。

めまぐるしく変化の激しい昨今の教育現場。世の中の流れが速すぎて、昭和世代に「教職の道とは何ぞや。」を先輩方から叩き込まれた私にとっては、逆に生きづらいつ感じることが多くなってきた。コスパやタイパとは正反対の世界で、時間をかけ成果の上がらない中で、校長職の難しさや限界を感じて、もがいているからだ。あるテレビ番組で「昭和はよかった。あの頃はこうだった。ああだった。」と若者に話をするのは「老害」と捉えられかねないと報道さ

れていた。愕然とした。そもそも若かりし頃、先輩方に導いていただいた様々な教えを、後輩に伝えることこそ、私たちの使命だと思っていた。「老害」だなんて酷い。気持ちが萎える。しかし、少し気持ちが落ち着いてから、再度思い返した。「不易と流行。やはり昔から変わらない教えがある。明日からもまた職員に昔話をしよう。時には笑いながら、時には真剣に論議しながら。」と気持ちを奮い立たせる。

先生方が疲弊しているな、笑顔が足りないなと思うことが増えた。それでも、課題に向き合いつながり多くの先生方が「子供のために」と踏ん張っている姿には頭が下がる思いだ。

中学校でいえば、現在は、部活動も大きな課題の一つである。生徒数が減少するとともに教職員の配置数が減少する。にもかかわらず、部活動数は変わらないので、どこの学校でも、新年度に向けての配置は困難を極める。部活動数を減らすとなれば、保護者の様々な意見が学校に寄せられ、簡単に減らすこともできない。先生方に頭を下げ、何とか顧問・副顧問に入ってもらい、学校によっては管理職も部活動をしなから、生徒が不利益を被らないように配置して

いくのだ。部活動の地域移行を進めたくても、指導者確保の難しさ、責任の所在、保護者の理解など乗り越えなければならぬハードルがいくつもある。進んでいるようでもなかなか進められない。行政と学校と保護者と、社会全体で力を合わせ、解決しなければならぬと思う。

今年度の校務分掌を決定する際、「これだけ職員数が減っているのに、みんなで力を合わせろしかない。生徒も先生方も保護者も、総力戦で頑張るよ。」と話をした。課題が多いということ、は、チャンスがたくさんあるということだ。私たち大人はいつも子供に「苦しい時こそ大きく成長できるチャンスだよ。」と語るではないか。

保護者が学校批判している時間はない。教職員が保護者批判している時間はない。

子供をしっかり守ることができるのは、新しい角度から効率のよい方法を取り入れ、昔のアナログのよさを残し、古いものと新しいものとを融合して、新しい形をつくっていく。そのバランスがよいところで、子供を守り育てていくことが一番なのではないだろうか。

様々な決断を迫られる中で、校長室は熟考する最適な場所だ。「この決断でよかっただろうか。何より生徒や職員のためになっているだろうか。」校長室の窓から見える青空を見上げながら、心の中で友人に問い掛け、思いを巡らせる毎日である。苦しい決断もあるが、その繰り返しこそが、生徒や教職員の笑顔を守る一歩だと、私は信じている。



卒業生への「最後の授業」

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会小学校校長部会長
前名山小学校長
宮 田 研 郎

卒業式の練習が本格的に始まった三学期のある日の昼休み、六年の学年主任の先生が校長室へやってきた。

「校長先生、お願いがあります。」

その言葉に続き、こんな話を切り出した。

「もうすぐ卒業となる六年生に、校長先生の『最後の授業』をしていただけませんか。校長先生の思いを、子どもたちに語ってください。」

この三月で役職退職となる私に氣を使つての話でもあったが、突然の申し出に少し戸惑いもあった。これまで、「本の読み聞かせ」等で教壇に立つことはあったが、ここ二十年以上、自分の思いを一時間も子どもたちに語る授業などやったことはなかったからである。ましてや六年生にとって、この時期の一時間は小学校での残り少ない貴重な一時間である。そう思いながら校庭を眺めると、春になればそれぞれの未来へと旅立つ六年生たちが、残り少ない小学校時代を惜しむかのように元気に走り回っていた。そんな彼らの背中を押せるなら・・・と、思い切つて「最後の授業」を引き受けることにした。

三月十九日、授業の日。教室の扉を開けると、嬉しいことに子どもたちが拍手で迎えてくれ

た。少し緊張した面持ちの子や、何を語るのかと期待するかのような眼差しの子を前に、私の胸も高鳴っている。卒業式まであと数日、六年生も、これから始まる中学校生活への期待や不安、迷いなど、誰もが自分の未来に思いを巡らせている。最後の授業は、そんな未来についてもつと考へてほしいと願い、次の「めあて」を掲げて行つた。

「今日は、みんなで『これからの未来をどう生きるか。』について、少し考へてみよう。」

子どもたちが迎える未来は不確かなもの、実際の未来の姿は誰にも予測できない。だからこそ、子どもたちには「どう生きるか」を考へ、どんな未来が待っているようにと、前を向いて歩んでいける力をもつことの大切を伝えたかった。授業では、私の祖父のエピソード、子どもたちが卒業式で歌う「いのちの歌」、金子みすゞの詩、生成AI、クリティカルシンキング、「議論を尽くした先に見えてくるもの」等々を話題にしなが、ら、「未来をどう生きるか」の答えとして、シンブルに五つの言葉にまとめながら、子どもたちへのエールとした。

「あなたらしく、自分らしく」

「目に見えない大事なものを大切にする」

「自分の強み（よさ）を生かす」

「自分で考へて、自分で決める」

「人との絆を大切にする」

この先、何があつてもチャレンジすることを忘れずに、自分を信じ、仲間を信じ、夢をあきらめないことなど、六年生の子どもたちがどの程度受け止めてくれたのかは分からなかったが、心を込めて語ることはできたと自分なりに満足できる時間であつた。また、何よりも嬉しく思えたことは、六年生それぞれ二クラスへの「最後の授業」を終えた時、「授業をする喜び、教えることの楽しさ」を改めて実感できたことであつた。教師ほど、胸が熱くなり心を打たれる仕事はない。それは、子どもたちの人生の途中に立ち合い、未来を信じて明るく灯をともし重要な役割があるからである。

今回、退任にあつたの執筆依頼には「校長への提言等」とあつたが、校長先生方に提言などおこがましいと思ひ、私の「最後の授業」を拙い内容で書かせていただいた。子どもたちに「未来にどう生きるか」という視点で伝えた五つの言葉は、これまで自分自身が大切にしてきたことである。そして、これから先もそういう人でありたいと思う。

授業の最後に子どもたちに伝えた言葉は「自分の未来を恐れず、力強く一步を踏み出してください。」であつた。この言葉を、私同様、役職退職となり新たな未来を迎えた多くの校長先生方へも届けたいと切に願う。



これからに期待すること

一般財団法人鹿兒島県校長会館前理事
前県連合校長協会小学校長部会副部長

前山下小学校長
下 假屋

誠

三十六年間のうち、十五年間は担任として子供たちの教育に直接関わることができた。今は子供たちや学校を取り巻く環境がかなり違っており、自分の思いを十分に子供たちにつけながら教育活動に臨むことができていたと思う。保護者は、内心いろいろな感情はあっただろうが、それを抑えて見守ってくれていたように感じる。問題を抱えることも多かったが、毎日が楽しかったし充実していた。自分の価値観を子供に押し付けたり、十分に理由を説明しないままに子供に納得を求めたりしたこともあったが、「きっとわかってくれるはずだ。」と、自分の思いを貫くことが多かったように思う。

教頭としての三年間を経て、それ以降は十五年間行政機関で勤務した。この十五年の間に、学校や教職員を取り巻く環境は大きく変化したように思う。「自分らしさ」や「多様な価値観」など、それまで聞かれなかった言葉で時代や社会を表すようになった。子供たちに自分らしさを自覚させるよう必死に頑張ったが、教員は自らの「らしさ」を失った。

教職は自分らしさを発揮できない職であることを、自らが育てた子供たちによって思い知らされたのが、教員不足の現状である。私たちが懸命に育てた子供たちは、教員となることを選ばなかった。それどころか、私たちを悩ませる保護者や地域民となることもあった。私たちは子供にいったい何を教えてきたのか、どんな人間に育てようとしたのか。そんなことを思いながら、自分自身は行政機関に長居している間に、教員としての感覚とセンスを失い、久しぶりに学校勤務となった時には、時代遅れの役立たずになっていた。「そんなことはない。」と言ってくれる人もいる。しかし、自分が一番よくわかっていのだ。「結果が全てであり過程は関係ない」これは私の仕事における持論である。過程を大切にするのは子供の成長そのものであって、教員は教育のプロとして求められる結果を出さなければならぬ。この意味において、決してよい評価を得られないであろう教育の現状をつくり出してしまったことは、正にプロとして「結果を出せなかった」のであり、失格である。

相変わらず教員は足りない。本県の採用試験の倍率は一倍を切ろうとしている。採用試験を前倒ししたり、大学三年生から受験させたり、採用する側も必死である。業務改善を図り、教員としての働き甲斐を繰り返し訴えたりもしている。しかし、それは、僅かに残っている教員志望者を各都道府県が奪い合いをしているだけであり、根本的な解決策にはなっていない。とにかく足りない状況を解消したいがために、「自分さえよければよい」の考え方になってしまっている。子供たちが教員を目指すわけがない。結果を出せない教員と、根本的な対策をとらない国や行政を見て、子供たちは教職に未来はないと悟り、教職に背を向けるのである。

三十六年間でうれしいことや楽しいことを数多く経験できた。素晴らしい人々との出会いもあった。後悔しているわけではない。しかし、教職にあこがれて教職を志し、教員となって三十六年後、教育の現場がこのような現状になるうとは思わなかった。教育は国の根幹であり、国の発展が教育にかかっていることは歴史が証明している。「予測困難な時代」だとか「持続可能な社会」などと言われているが、どんな時代でも予測困難であったし、人は常に持続可能な社会を求めてきたのである。私たちは、自らの足元を見なければならぬ。よい人材を育て、教職というバトンをつないでいくことが、「持続可能な社会」をつくる第一歩であると私は思う。



感謝と恩返し

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会中学校長部会長
前伊敷中学校長
龍 義 文

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」

「草木は毎年変わらず美しい花を咲かせているが、人は歳をとるごとに変わってしまふ。いつまでも昔のままではいられない。」という唐の時代の漢詩の一部分を毎年のように誰かに「惜別の辞」として贈ってきたが、いよいよ自分か……という万感の想いである。

教職生活の最後二年間は、連合校長協会の役員として、大変お世話になり、校長として様々な勉強をさせていただいた。どれだけの仕事ができただかは別として、御支援・御協力いただいた会員の皆様や事務局の方々をはじめ、関係者の皆様に心から感謝と御礼を申し上げたい。

昭和六十二年四月（小学校 四百三十三人、中学校 百九十人、高校 百十人）鹿児島市立桜丘東小学校に採用された時には、校長になるなんて考えもなかっただろうが、置かれた環境と時間が人を育ててくれたのだろう。たくさんの子どもたち、保護者、地域の方々、同僚に出会い、何物にも代えがたい貴重な経験の連続であった。

一人で校長室に居ると歴代の校長写真から声が聞こえてくることもある。

「学校は大丈夫か?」「校長の職務を全うしているか?」「しっかりせい。」……声が聞こえてくるのは決まって、自分が何かの決断に迷っている時。

これまでも『迷った時は前に出る』『走りながら考える』ことがよくあったが、経験を重ねてきて、どうしても慎重になってきているような気がしている。それは、臆病になったのではなく、物事を広く、深く熟慮するようになったこと、そして何よりも『学校がめざすもの』に少しでも近づきたいとの想いからである。そこで、『めざすもの』を考えてみると、『日々の実践に学校・教師・生徒の在るべき姿を求め続け、地に足のついた指導者、責任を果たす指導者となる』ことであろう。併せて『人が育ち人を育てる学校』となるよう、よき社会人となり、師弟同行を心に刻み教育実践を行うことであろう。これは伊敷中がこれまでの実践の中で大切にしてきたことでもある。そしてその一番最後が、『生涯を掛けて「先生」となれ』である。

今、公立小中学校の教員不足という問題がある。こんな時だからこそ、教員本来の魅力を再確認し、『学校がめざすもの』への再挑戦が必

要である。

退任に当たり次のことを残しておきたい。
「しなやかさ」と「たくましさ」を兼ね備えた校長を目指してほしい。

校長の「しなやかさ」とは、豊かな人間性に裏付けられた包容力とどのような状況にあっても適切かつ柔軟に物事に当たることができる対応力。

校長の「たくましさ」とは、豊富な経験と知見、そして、教育者としての確固たる信念に基づく判断力、人の心を動かす表現力、社会の変化をいち早く的確に捉え、進むべき道を見いだすことのできる先見性。

しなやかでたくましい校長を目指すとともに、学校のあるべき姿を思い描きながら、教育改革の当事者としてリーダーシップを発揮し、教育活動の充実に取り組んでほしい。

自分を振り返るとき、リーダーたる校長が、いかに全員に目配せができていたか?言い換えれば、学校の全ての人たちに「あなたは、わたしにとって重要な人ですと伝えたか。」であるらしいが、自分にはできなかった。

一生懸命続けた先には、いつもと違う景色があり、一生懸命に頑張った人にしか見ることのできない、その景色を見てほしい。

最後に、会員の皆様方の御活躍を期待するとともに、連合校長協会のますますの充実発展を祈念して退任のあいさつとします。ありがとうございます。また会いましょう。



「和顔愛語」を忘れずに

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会特別支援学校長部会副部会長
前鹿児島盲学校長
大山直美

三十八年間の教員生活を振り返ると、いろいろなことが思い返される。

新任の頃は、担任業務にただただ一生懸命だった。中堅になると、校務分掌で重要な係を任されるようになり、管理職の先生方の指導の下、四苦八苦しながら業務に取り組んだが、後ろを振り返ると、いつも管理職の先生方が見守ってくださっていた。管理職になると、学校経営や職員指導などについて管理職として判断しなければならなくなった。後ろを振り返っても誰もおらず、いろいろと悩み、その重圧も大きかったが、職員に支えられて自分の思いを少しは実現できたのではないかと思っている。

この三十八年間で、悩むこともたくさんあったが、「どうにかなる。」と自分に言い聞かせながら業務に取り組んできた。そのときの支えは、学校の児童生徒や保護者、職員の笑顔だったよ

うに思う。

仏教用語に「和顔愛語（わげんあいご）」という言葉がある。「和やかな笑顔と優しい言葉で人に接すること」を意味しており、和顔が笑顔、愛語が優しい言葉や親しみのある言葉だそうである。「笑顔で人と接すると、あなたは周りの人を和やかな気持ちにさせることができるですよ。優しい言葉を掛けると、あなたと接する人を温かい気持ちにさせることができますよ。」と釈迦如来がおっしゃったそうだ。話をするときに相手が笑顔だと安心して話すことができたり、相手の笑顔を見ると心が穏やかになったりする。笑顔は不思議な力を持っていると改めて思った。

「和顔愛語」をいつも実行に移すことは難しいかもしれないが、相手が笑顔になり幸せを感じると、自分も幸せな気持ちになると思う。辛い

ときや嫌なことがあったとき、愚痴をこぼしたくなるとき、そんなときでも周囲への思いやりを忘れず、まず自分から笑顔と優しい言葉に心掛けたいものである。これからも不思議な力をもつ笑顔忘れずに「和顔愛語」で日々を過ごしていきたいと思う。

校長としては二年間務めたが、鹿児島盲学校の児童生徒や保護者、職員の笑顔に支えられて楽しみながら学校経営を行うことができ、幸せな管理職であったと、とても感謝している。これからの鹿児島盲の教育を担っていく管理職の先生方にも「和顔愛語」で楽しみながら学校経営を行ってほしい。

連合校長会は、校種を超えてつながっている全国でも希有な組織であり、他県にはない組織である。校種を超えてつながるといふ強みを生かして、今後も校種間で連携・協働して鹿児島盲の児童生徒の成長のために、学校教育の充実を図っていただけることを切に願っている。

最後に、これまでお世話になった方々に感謝申し上げるとともに、連合校長会のますますの御発展と会員の皆様の御活躍を祈念申し上げます。



日本教育界における三度目の大改革

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会特別支援学校校長部会副部長
前武岡台特別支援学校校長
濱 崎 信 一

これまでの特殊教育が特別支援教育に転換した平成十九年度、ある雑誌で「日本教育界における三度目の大改革」という論評を読んだことがあったが、当時は少し大げさな表題であると感じた。昭和五十四年の養護学校の義務化や特別支援教育への転換は大きな出来事ではあるが、日本教育界全体において大改革に相当するものなのか若干の違和感があった。論評で示されていた大改革の出来事は次のとおりである。一回目は日本で学校教育制度がスタートした明治五年の学制発布、二回目は日本の基本的な学校教育の仕組みとして六・三・三制が制度化された昭和二十二年の学校教育法の制定、そして三回目が平成十九年度の特別支援教育の本格的実施である。

ところで、平成十九年の「特別支援教育の推進について（通知）」の「特別支援教育の理念」の中で、「特別支援教育は、（中略）特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。」と示されているが、この時点において、各校種のどれだけの校長が、特別支援教育がこれほど大きな学校運営の課題になると考えていたであろうか。

特殊教育が障害の種類や程度に応じて教育の場を決めてきたのに対し、特別支援教育は全ての学校で、個々の子供の教育的ニーズを把握して一人一人に合わせた教育を行うものである。

今でも忘れないが、平成二十一年度の三学期、巡回相談で訪問していた地域の小・中学校長数名から、日を置かずして電話がかかってきた。問合せ内容はいずれも同じで、「四月から特別支援学校の子供たちは、地域の学校に転校してきますか。」という戸惑いも入り交じったものであった。背景には、当時、内閣府に設置された「障がい者制度改革推進会議」における今後の教育の方向性の議論の中で、「障害の有無にかかわらず、全ての子供は地域の小・中学校に就学し、かつ通常の学級に在籍することを原則とするべきである。」や「特別支援学校の存在は、インクルーシブ教育の考え方に反するのではないか。」といった意見が出され、このことが一時的ではあったが特別支援学校不要論としてマスコミに取り上げられたことがあった。新年度の学校経営の在り方を思案していた各小・中学校長にとって、特別支援学校から大勢の子供たちが転校してくるかもしれないことを想起させ

た報道は衝撃的なものだったに違いない。

近年、特別支援学校だけでなく小・中学校、高等学校等においても特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合が増加し、多くの小・中学校では特別支援学級が複数設置されるところにも、高等学校においては通級による指導が展開されている。このような状況の中、どの学校においても、特別支援教育の充実が学校運営の大きな柱となっている。文部科学省は、令和四年三月三十一日、全新任教員に十年以内に特別支援教育を複数年経験させることや管理職の登用等に当たっては特別支援教育の経験も含めて総合的に考慮すること等を求める通知を发出している。また、本県では、「かごしま県教員等育成指標」において、教員等に求められる資質の五つの柱の一つとして特別支援教育に関する内容が位置付けられたところである。今、求められるのは、子供一人一人に必要な特別の指導内容と教育上の合理的配慮を含む支援の内容を組織として検討し整理することのできる学校力の向上であり、それを可能とする教員の特別支援教育に関する専門性の向上であろう。

十九年目を迎えた今なら、全ての学校で全ての教員が特別な支援に携わることとした特別支援教育への転換は、日本教育界におけるシステムの大改革であったと思える。この教育の進展・充実がインクルーシブな社会の構築につながるものとして、私自身、今後も微力ながら尽力したい。

新任の抱負



学び続ける

魚見小(南) 山田島 規 浩

四月一日、地頭所教育長から辞令をいただき、校長職を拝命した。教育長と教職員課長の講話を聴きながら、「身の引き締まる思い」を感じた。自然と背筋が伸び、軽く身震いした。

魚見小学校に着任早々、「校長先生」と呼ばれ、辺りを見回してしまふ。まだまだ自覚が足りない。田之畑教頭から説明を受け、前任の校長と教頭が、学校の基盤を固めてくださっていることに只々感謝する。

学校の雰囲気はとても明るい。それは、職員が同じ方向を向いて物事に取り組む姿勢を感じたからだ。私にはもったいないくらいだ。この人たちとなら必ずいい学校をつくれると直感的に感じた。若い先生から経験豊かな先生まで、とてもバランスがよい。何といたっても、自然な表情で力まず仕事に向き合っている姿がある。職員に恵まれ、子供たちや地域に恵まれた。しかし、私自身の校長としての課題は多い。これまでの経験を生かせるだろうか。

これまで多くの上席に仕えてきた。私の知る校長は皆、教育への情熱に満ち溢れる方々で、多くのことを教えてくださった。私はあの日、校長先生のようにできるだろうか。

教頭との連携も自分の課題である。

教頭経験がない私は、教頭の重荷になってしまふのではないかと悩む。しかし、この際、

初心に立ち戻って、全てを一から学ぶつもりでやってみよう。教頭との協働で新しい何かが生まれるだろう。そして、生き生きと働く管理職の姿は、職員にとって目指したい姿、学ぶ意欲を喚起する姿になると信じている。

学校教育への期待に応えられるだろうか。

近年、令和の日本型教育、主体的・対話的で深い学び、個別最適な学びと協働的な学び、学習者主体の授業、教育のDX化など、子供たちがこれからの社会でよりよく生きる力を身に付けるための教育の在り方が示されている。校長の立場で学び直し、その目的と手段を見極めて、本校の職員と共に実践したい。

保護者や地域が学校に求めるものも多様化するだろう。まずは、安心・安全な学校生活を約束したい。個々の案件についても、本校の軸を定め、周囲の期待や要望に対しても、しなやかに応える職員・学校でありたい。職員一人一人は魚見小の一部でもあり、全部でもある。その自覚を育てることも私の仕事である。

不易と流行を見極め、端的に表現する。

「初めから不易があるのではなく、実践を積み重ねたときに、変わらなくなる大切なものが不易と呼ばれる」と、前の職場で教わった。常に物事を多面的に考察し、ときには常識といわれることも疑い、原点に立ち返ることで本質に迫

っていききたい。その営みは、物事を自分の言葉で分かりやすく、シンプルに表現することにつながるはずだ。学び続けることで、物事の本質、本物を見抜く力を高めたい。

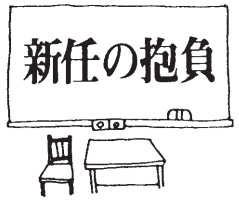
学校を開かれた学びの場にする。

魚見小学校の教育目標は「聴き合う・学び合う・支え合う」である。「学びの共同体」の考え方を柱とした授業改善と学級経営によって、目標の姿に迫りたい。この考え方は、長年私が理想としてきた学びの姿であった。教育目標と研究テーマを知ったとき、この学校に赴任できたことに改めて感謝した。理論と実践を連動させ、子供と教師が共に伸びる教育活動が展開されるよう、研修を充実させたい。本校には、子供と真摯に向き合い、一人一人が自分の特性を生かしながら、共に学び続ける職員の姿がある。目指す学びの姿への道のりは、決して容易なものではない。しかし、同じ方向を向き、互いの意見を聴き合う職員は、学び合い、支え合っている。私が直感的に感じた感覚の理由は、ここにあったのかもしれない。

また、職員が生き生きと働くための業務改善も私の仕事である。各自が自身のワークライフバランスを充実させるために、スケジュールや健康状態を管理できるよう、改善の見える化を図りたい。

私がこれまでに学んできたことや魚見小の取組を、職員、子供たち、家庭、地域の方々と共有し、学校を開かれた学びの場にしたい。そして、私も新たな学びを得たい。

「校長はゴールじゃない。スタートだ。」と、教えてくださった先輩校長に、一日でも早く追いつけるよう、日々精進したい。



新任校長として

川内南中(北) 入 佐 俊 和

令和七年四月一日、私はこの日を忘れることができないと思う。

校長としての一步を踏み出すことになるこの日に行われた、カイクックス交流センターでの辞令交付式。凜とした雰囲気、張り詰めた緊張感、そして、渡された辞令の重み。「自分で大丈夫だろうか。」という思いが何度も頭をよぎった。しかし、辞令をいただいた以上、できることを精一杯取り組もうと思った。地頭所教育長から「信念と愛情を持って取り組んでほしい。」という言葉を送った。中島教職員課長からは、学校教育を取り巻く環境の変化や危機管理、みんなで気分よく取り組むことの大切さについて御指導いただいた。これらの講話から、改めて任される責任の重さを感じた。

これまで教育の現場や教育行政の場で学んできたこと、培ってきた経験を生かしながら、未来を担う生徒たちの成長を支え、地域とともに歩む学校づくりに尽力していきたい。

校長として、以下のことに取り組んでいきたいと考えている。

一 生徒一人一人の可能性を広げる学校へ

中学校は、生徒が自己を確立し、夢や目標

を見つめる大切な時期である。私は、全ての生徒が自分の強みを伸ばし、失敗を恐れず挑戦できる環境を整えることが重要だと考える。そのために、学習面のみならず、部活動や学校行事等を通して、多様な経験を積める場を大切に、「学びの楽しさ」と「自己実現の喜び」を実感できるよう支援していきたい。

二 保護者との連携を深め、信頼される学校へ

生徒の成長には、学校だけではなく家庭の協力は不可欠である。保護者の皆様と密接に連携し、教育方針や生徒の様子を積極的に共有できる関係を築くことにより、よりよい学びの環境が整うと考えている。定期的な情報発信等を通して、開かれた学校づくりを目指すとともに、「学校と家庭、地域が共に育む教育」を推進していきたい。

三 地域とともに歩む学校へ

学校は地域社会の一員であり、地域との結びつきは生徒の成長に大きな影響を与える。特に、本校区は地域の方々の理解と協力のもと、教育活動が展開される。地域の皆様の御支援をいただきながら、地元の文化や歴史に

触れる機会を増やし、地域に誇りをもつ生徒を育てたいと考えている。また、地域の方々との交流を通して、生徒が社会の一員としての自覚をもつことができるように努めていきたい。

入学式前日、入学式準備が行われた。どのような様子なのか気になった私は、様子を見に体育館に行った。新二年生が、教師と共にときばきと準備を進めていた。生徒たちに「春休みなのに、準備に来てくれてありがとうね。」と話したところ、生徒からこのような言葉が返ってきた。「かわいい後輩のためですから。」こう話したのはこの生徒一人だけではなかった。複数の生徒がそう答えてくれた。そのような生徒を育ててくれた職員、保護者に感謝するとともに、素晴らしい教育環境をつくってくださった前任の校長先生に感謝の思いを新たにしたい。

未来を担う生徒を育てるために、私は、生徒たちが卒業後も自信をもって自分の道を歩めるような教育環境を築こうと考えている。キャッチフレーズは、『笑顔』と『真顔』が見える学校。多くの場面で、職員、そして生徒の「笑顔」と「真顔」が見えるようにしていきたい。前任の校長先生のような経営方法を、私が真似することはできないと思う。しかし、目指すゴールは同じである。方法は、自分ができるやり方で実行していくこと。職員、生徒、保護者、地域の方々と手を取り合い、力を合わせながら目指すゴールへと向かっていきたい。

新任の抱負



「一人ひとりが主役！」の学校づくり

「これまでの挑戦を未来に生かす」

福山高 吉井 秀一郎

一 はじめに

満開の桜の下、心地よい春風と美しい鶯のさえずりに包まれ、福山高校の門をくぐった。ここは三十年ほど前に練習試合で訪れた場所であり、「鹿屋市から全国へ！」のスローガンを掲げて、県新人戦団体優勝一回、高校総体個人戦三回の出場を成したソフトテニス部監督としての日々が、昨日のことのように思い出された。

二 学校を離れて挑戦したこと

私は、地歴（日本史）を専門教科としており、学校から埋蔵文化財センターへ異動した。そこでは遺跡の発掘調査と報告書作成等を担当した。次の異動先、歴史資料センター黎明館では、全国の博物館を駆け回り、資料を集めて企画特別展を開催し、展示場リニューアル事業を完遂した。これらの運営、広報活動、資料調査、展示場の制作、講演活動、予算要求と執行等の業務は、調整力と交渉力が求められるもので、学校ではできない貴重な経験をする事ができた。また、同時に教育機関の役割と博学連携の在り方等についても、見識を深めることができた。

三 学校で新たに挑戦したこと

コロナ禍の令和二年、十八年ぶりの学校である奄美大島の古仁屋高校へ教頭として異動した。そこでは、瀬戸内町と連携して「地域みらい留学」の仕組みを活用した全国規模の生徒募集を展開し、目標数を満たす生徒を迎え入れ続けることができた。

全国規模の学校説明会に参加することで、他県の自治体と学校の取組を知る機会が得られ、地域の魅力とともに、やはり学校の魅力向上が欠かせないことを改めて認識した。この取組は、地域と協力しながら「学校を核とした地域づくり」を進めるための経験と多くの情報を与えてくれた。

四 これからの挑戦

本校は、各学年普通科一クラス、商業科一クラスの定員二百四十名の全日制高校である。令和七年四月現在、八十三名が在籍している。

新年度をスタートさせるに当たり、私は学校スローガンを次のとおりとした。

「一人ひとりが主役！ 自律と貢献、未来を見すえて主体的に学ぶ」である。

日常を見渡すと、少し前までは予想もして

いなかった米不足（令和の米騒動）が起こるなど、予測困難な時代を生きていることを実感する。この時代を生徒たちは、当事者として生きていかねばならない。

だからこそ、自分の長所を生かして、未来を見すえて自分に問い掛け、自分で考え、自分で決めて行動してほしい。このような主体的な生徒を育てたいという願いを込めて、先のスローガンを掲げたのである。

また、職員に対しては、教科指導や生徒指導等で迷いが生じたときには、学校スローガンに一度立ち返って考えてみるこの大切さを、繰り返し伝え続けていきたいと考えている。

ここで一つ本校の取組を紹介しておく。総合的な探究の時間において、「未来を語る生徒を生み出す『福山みらい創業塾』」一人ひとりの生徒が主役です」に取り組み、令和五年度は「共生・共働型地域コミュニティづくり推進優良団体学校部門金賞」を受賞するなど成果を上げており、この取組を持続可能なものにしていきたいと考えている。

五 おわりに

これまで、学校内外で様々な挑戦の機会に恵まれた。その経験を福山高校へ還元できることに大きな喜びを感じている。新たな視点で学校を見つめ直しながら、隠されていた学校の魅力を発掘し、積極的に情報を発信していくつもりである。また、PTAや同窓会、地域と協力しながら「学校を核とした地域づくり」に貢献できるよう、舵取りを行ってきたい。

「一人ひとりが主役！」の学校とするために。

新任の抱負



共に成長し合う学校を目指して

鹿屋特支 岡 元 明 広

令和七年四月一日、カクイックス交流センターにて、新任校長辞令交付式があり、校長として辞令をいただいた。その瞬間から身の引き締まる思いが高まりつつ、鹿屋へ向かった。鹿屋市は、二年間の期限付き教諭で過ごした教員生活スタートの地である。その地に、三十年ぶりに赴任することとなり、初心に戻って考えよとの機会をいただいたものだと思うとともに、新たな一歩を踏み出す緊張感と、これまで経験したことのない重責に、期待と不安が入り混じる複雑な心境で学校に到着したのであった。その後、校長室へ入ると、多くの先輩方からメッセージが届いており、改めてしっかりと業務に励まなければとの思いを強くしたところである。早速、午後から会議があり、自分なりの言葉で挨拶をした。また、前任の校長先生から引き継いだグラウンドデザインなどを読み込み、翌日の職員会議に備えたところである。ただ、私自身の言葉としても何かを伝えたい、そう思いながら初日を終えた。

「C&C」。これが、私なりに一晩考えたキャッチフレーズである。今年度の合言葉にしたいと職員会議で説明し、一緒に取り組もうと締めくくった自分なりのメッセージである。一つは、「チェンジ」。社会の情勢に応じた変化への挑戦である。時代の変化や社会のニーズに柔軟に対応した教育の提供ということで、指導観や児童生徒観などの「観の転換」に取り組むことを共通理解した。学習指導要領の確認やICT機器の活用など、具体例を話しながら共有に臨んだ。ただ、特別支援学校の教育課程等、本質を見失うことのないように「不易と流行」を踏まえた「観の転換」を確認した。また、仕事観の転換、ワークライフバランスなど、業務改善の推進についても確認したところである。業務改善に積極的に取り組み、児童生徒と向き合う時間をより多く確保し、教育の質を高めることを共有した。

そして、もう一つは「チャレンジ」。専門性の向上への挑戦である。教職員一人一人が、それぞれの専門性を高め、互いに学び合い、協力し合うことで、質の高い教育を提供できる組織を目指すことを共有した。研修機会の充実・確保や外部の専門家との連携を積極的に行い、教職員全体のスキルアップを図りたい。児童生徒の多様なニーズに応えるためには、私たち自身の学び続ける姿勢が不可欠だと確認したところである。併せて、趣味や特技などへのチャレンジも積極的に取り組み、「人」としての幅を広げ、ワークライフバランス、楽しく仕事をするこの前提である健康第一ということについても確認したところである。

ところで、私は週末に野球に携わらせていただく機会がある。その際に、「やっぱりセンスがいいね。」という言葉を聞くことがある。これは野球等のスポーツに限らず、芸術や日常生活においても使われている言葉である。私はこれまで、この「センス」という言葉は、その人がもっている天性みたいなものだと思っていたが、最近そうではないと思うようになった。「センス」とは、もちろん本来もっているものもあるだろうが、恐らく、かなり努力をしたり、研鑽をしたりして生まれるものではないかと思うようになった。野球においても、他者がいない所で必死に練習をしている人がいる。それが結果となり、「センスがいい。」との称賛を受けているように思えるのである。

今年度は、「C&C」、「チェンジ」と「チャレンジ」を両輪とし、安心・安全な学びの場の創造と児童生徒の可能性の伸長を図ってきたい。様々な「観の転換」を図ることで「センスのいい授業づくり」の実践につながると信じている。児童生徒の多様性を尊重し、きめ細やかな「適切な指導と必要な支援」を行うことで、成長できる環境創りを組織として取り組みたいと思っている。そのことで、児童生徒の笑顔が輝き、可能性が大きく開花する学校、児童生徒と教職員が共に成長し合う学校になると思う。そして、保護者や地域の方々との連携を密にとりながら、地域の特別支援教育の核となるべく努力したい。

まずは、私自身が、皆様の御指導と御鞭撻をいただきながら精進し、積極的に「チェンジ」と「チャレンジ」に取り組むたいと思っている。一人一人の児童生徒の実態に応じた「オーダーメイドの教育」の提供のために。

ある日の校長講話



令和七年度のはじめに

清水小(南) 有 水 勝 一 郎

「はやぶさ」という日本がつくった小惑星探査機があります。はやぶさのミッションでは、様々な苦難やトラブルに見舞われましたが、小さな星である小惑星「イトカワ」から星のかけらを地球に持ち帰り、世界中の大きなニュースとなりました。そのはやぶさの全ての責任者をされていた方が、川口淳一郎という先生です。

校長先生は、宇宙に関わるお仕事も少しだけしていることもあって、川口先生とお話をし、質問をさせていただいたことがあります。その質問は、

「はやぶさに乗せた、ロケットの発射スイッチを押すとき、どんな気持ちで押したのですか？」というものでした。

川口先生は、この質問に次のように答えてくださいました。

「はやぶさもロケットもね、発射スイッチを押すと、もう二度と帰ってこれないんです。ですから、スイッチを押す瞬間まで、『もうやるこ

とはない?』やり残したことはない?』と、繰り返しチェックしました。そして、スイッチを押す瞬間は、もう全てやり尽くした。大丈夫! 行ってこい! と、『わくわく』しながらスイッチを押したんです。」

川口先生が『わくわく』しながら押したロケットの発射スイッチには、やるべきことをやるべきときに、一つ一つの作業を精一杯やり尽くしたという強い思いがあったのです。

私たちの清水小学校は、閉校まで、そして君たち二人の小学校卒業まで、残り一年を切りました。閉校式典も卒業式も、二度と再び経験することのない大きな行事となります。この一年というかけがえのない時間を、清水の児童として先生方と一緒に精一杯やりきってほしいと願っています。そして、来年三月を「わくわく」しながら迎えられるよう、みなでこの清水小の令和七年度を創っていきましょう。

十二月三日は、何の日でしょう

協和小(隅) 弓 指 修

十二月三日は、国際障害者デーといって、世界中で行われる障害がある人たちのことを考える日のことです。世界には、いろいろな障害がある人がたくさんいます。例えば、目が不自由な人、耳が聞こえにくい人、体が不自由な人などです。昔は、障害がある人は、学校に行ったり、働いたりすることが難しかったり、周りの人に理解してもらえなかったりすることがたくさんあったのだそうです。そこで、一九九二年国際連合という世界中の国が集まって話し合いをする場所で、「障害がある人も、障害がない

人と同じように、楽しく幸せに暮らせるようにしましょう」と決められました。そして、十二月三日を、毎年みんなで障害について考える日にしよう、ということになったのです。

これは、世界的に有名な人が書いたお手紙です。だれが書いたお手紙でしょうか。ここに本人が青い色鉛筆で書いたサインがあります。始まりのアルファベットはHです。正解は、ヘレン・ケラーという人が書いた本物の手紙です。彼女は、一歳半のときに病気で、目が見えなくなり、耳も聞こえなくなり、話もできなくなりました。七歳で出会ったサリバン先生は、自分の指で作った手話の文字の形をヘレン・ケラーに触らせたり、彼女の手のひらに指で文字を書いたりして、言葉を教えました。ヘレン・ケラーは言葉を学び、周りの人々と話すことができるようになりました。そして、作家となり本を書きます。著書「わたしの生涯」は、世界中の多くの人に読まれ、勇気や希望を与えました。彼女の言葉を紹介します。「あきらめずにいれば、あなたが望む、どんなことだってできるものです。」とてもすばらしい言葉です。

障害がある人も、障害がない人も、みんなが楽しく過ごせるように、優しい気持ちで接していきましょう。ヘレン・ケラーの本は図書室にあります。読んでみてください。

縁

赤木名中(大) 肥 後 孝 幸

先日、新入生説明会で六年生に「中学校は何をするところ?」と問い掛けました。私は、「大人になるところ」だと思います。

では、大人になるとは？

「自分で決めたことに責任をもつ。自分の行動、言葉、周りとの関係、いろいろありますが、三年間かけて大人になるために一緒に頑張りましょう。」と話をしました。

話は少し変わって、一期一会という言葉は聞いたことがあると思います。元々は茶道の心得を表した言葉だそうです。生涯に一回しかないと考えて、そのことに専念するという意味です。ので、一生涯にただ一度会うかどうか分らないほどの縁で、出会いを大切にすることの例えです。

私はこの学校に赴任するまで、赤木名中に来たことはありませんでしたが、赤木名中に赴任することが決まっていたいろいろな人から連絡が来ました。

「赤木名中はよい所だよ。私の初任地も赤木名中だった。」という先輩の先生。

「赤木名中にK先生がいるから頼りになるよ。」と言ってくれた元上司。

「T先生とM先生によりしく伝えて。」と言った高校の先輩。

「M先生を鍛えてください。」と言った後輩。

先日、資料室を整理していると赤木名中学校五十周年の写真が出てきました。その記念式典の写真は何気なく見てみると、どこかで見た顔がありました。父の顔でした。その頃父は奄美大島にいましたので、父も赤木名中に来たんだと思うと同時に、いろいろな「縁」があるなと感じました。

私を含め皆さんは縁あって、今赤木名中学校にいます。この縁はそれこそ一生の縁だと思います。三年生は卒業まであと一か月ちょっとです。ここで過ごした縁を忘れずに、大切にしてください。

読書案内



池上 彰 著

池上彰の未来予測 After2040

02 教育編

田中小(始伊)谷 口 善 郎

著者は、テクノロジーや社会の変化を背景に、教育がどのように進化していくのかを予測し、今後求められる新たな教育像を描いている。教育に関心がある人々、特に未来の教育を見据えた改革に取り組む人々にとって、有益な情報満載の一冊である。

教育の未来を予測するに当たり、テクノロジーの進化や社会のグローバル化が、教育の在り方に大きな変化をもたらすと指摘する。特に、AIの進化により、学びのスタイルは大きく変わる。個々の生徒に合わせたカスタマイズされた学習プランの提供が可能となり、教師と生徒の関係が変化し、教育の質や効率も向上すると説明している。

学びはより個別化され、学習ペースや興味に
応じた内容に変わっていくことが考えられる。

このような変化に対応するためには、教育システムの柔軟性と、教師の役割の再定義が必要になると指摘する。

教師の役割が大きく変わることも予測する。AIが授業内容を提供する一方で、教師は生徒の学びの進行をサポートし、モチベーションを維持させる役割を担うことが強調されている。教師の専門知識や感情的なサポートがますます重要となり、単に教科書を教えるだけではなく、生徒の個性や心の成長に寄り添うことが求められるようになる予想する。

また、教師自身がテクノロジーを駆使して授業を進めるスキルを持つことが必須となる。

さらに、生徒同士の協力やコミュニケーション能力、問題解決能力がますます重視されるようになる。

教育の国際化とその影響にも触れている。世界各国との繋がりが強くなる中で、グローバル社会で活躍するためには、他国の文化や歴史、価値観を理解することが必要になる。外国語教育の重要性が増すとともに、世界中で教育の質が均等になるような取組が求められる。

さらに、テクノロジーの発展により、物理的な教室を超えて、世界中の学校と繋がりがながら学ぶことが可能になり、遠隔地にいる生徒でも質の高い教育を受けられる機会が増える。それにより、教育格差の解消にも寄与する。

未来の教育における最も重要な課題は、テクノロジーの進化に伴って生じる教育格差である。デジタルデバイスが拡大する中で、どのようにして全ての子どもに平等な教育機会を提供するかが問われる。これに対し、政策的な支援や、地域ごとの教育環境の整備が必要だと強調している。

また、教育の質を向上させるためには、教師の専門性を高めるとともに、教育機関と企業、

地域社会との連携を強化することが重要であり、教育が社会全体の問題であるという視点を持ちながら、様々なステークホルダーが協力して取り組む必要性を説いている。

主婦の友社 千八百円

■ 和田秀樹 著

どうせ死ぬんだから

「好きなことだけやって寿命を使いきる」

佐仁小(大)根 釜 文 子

父も教員だった。定年退職をした四月一日から、その奇行は始まった。酒・煙草・パチンコをきっぱり止め、朝夕のウォーキングやダンベル体操を欠かさず、小さな土地を借りて無農薬野菜を育て、それに酢をかけ、バリバリ食べるようになった。気味悪がる家族に、

「校長上がりは三年持たないって知ってるか。」と得意そうに言った。『校長で退職したものは、三年以内に死ぬ確率が高い。でも、三年過ぎれば長生きする』というジンクスらしい。まだ三十代だった私は「校長って職は恐ろしい。」と愕然としたが、他の家族は何言ってもんだかと笑っていた。

そのことをきっかけに「死」について考え始め、宗教書を始めとして書籍を読み漁り、ちょうど誰しも死について考えざるを得なかったコロナ禍の頃、自分の生き方・考え方に合っているこの本と出会った。三十五年にわたって高齢者の精神科専門医として国内外で患者を診てきた

筆者が出した結論は『どうせ死ぬのだから、生きている間を楽しもう』という当たり前の思いを持てるかどうかで人生が決まってくるということだった。日本は、国を挙げてあらゆる手を駆使して生かせる限り生かす医療を展開しているが、本当にそれが幸せへとつながっているのか。答えはノーである。

○体にいいものより好きなラーメン週5

○死にたくないと思うほど幸福度は下がる

○スウェーデンには寝たきり老人はいない

○死ぬまで現役でいられる方法

等々、八十以上のワクワクするようなトピックが連なっており、二年経った今でも飽きずに読み返し、どうやって死を迎えようか楽しみにしている。

さて、父は無事に魔の三年が過ぎたとたん酒も煙草も復活させ、やりたいことをやり散らかして八十二歳で他界した。「幸せだった。」と最後に本人が言っていたのだから間違いない。父に負けない幸せな死を迎えるのが私の今世の目標である。

S B クリエイティブ株式会社 千四百三十円

■ 東井義雄 著

村を育てる学力

串良中(隅) 霜 田 さおり

本書は、昭和三十二年五月が初版となる。自分が生まれる十年以上も前の本を手にしたきっかけは、昨年度、オンラインで行われたコミュニティスクールに関する研修会の受講である。

講師の金子満准教授の講義を拝聴し、その中で紹介された本の中の一冊であった。

本書の内容は、農村部にある小学校での著者の実践の記録が主となるが、その教育観は現代に通ずる普遍的なものである。著者は、高度経済成長期の競争原理主義の影響により、「自分さえ」「わが子さえ」という閉鎖的な思考が広がる時代、相互に磨き合い育ち合う学びを重視し、同時に、身の回りの物事に対して教科の視点で疑問をもち、解決するために考え実行する子供を育成することに力を注いだ。そのために、彼らが育つ背景、つまり、村を知り、子供の住む土地に暮らす人々を理解することに努めた。その上で、子供の学びを大人の社会に一度くぐらせ、その中に課題発見・探究させた。そして、子供たちの学びの成果は、やがて、大人のものの見方や考え方にも影響を及ぼしたのである。

私は、令和六年末まで、離島の小学校に三年間勤務した。地域全体が学校を愛し、また、職員も地域を知り共にあらうと努力する、実に尊い学校であった。地域学校協働活動として、しばしば地域や島外の方々に参加していただいた。周囲に恵まれ、「人をつなぐ」という校長の仕事をなんとか進めることができた。もしもこのとき、本書に出会っていたら、地域素材を学習に生かすという方向だけでなく、子供の学びを地域に広げるという取組も展開できたかもしれない。そう思うと心残りである。幸い、現在の勤務校は、コミュニティスクールがあり、また、地域の方々も熱い。さらに、町づくりを中心に金子准教授とのつながりも深い校区である。やはり、私は人に恵まれていると思わずにはいられない。校長としての第二ステージ、子供たちの命を輝かせる学校づくりを追究し続ける。

明治図書 三千七百五十一円

掃除や片付けをすると 心が磨かれ落ち着く。

気付く人になり謙虚になる。感謝の気持ちが生まれ優しくなる。



春の霧島

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人 鹿島市立吉野中学校長会館だより

教育長異動

○新任 令和七年四月一日付

垂水市 明石 浩久 氏

(元鹿児島市立吉野中学校長)

○再任 令和七年三月四日付

枕崎市 木之下 浩一 氏

○再任 令和七年四月一日付

鹿児島市 原之園 哲哉 氏

○再任 令和七年四月十六日付

中種子町 鯨島 孝則 氏

〔事務局より〕

令和七年度の事務局員は次のようになります。よろしく願いいたします。

事務局長 下古立 浩

事務担当 中 夷 美也子

事務担当 町 田 みどり

編集後記



昭和百年といわれる今年、令和七年度が始まり、早くも二か月が過ぎ去ろうとしています。近年、AIの進化や情報化の加速により、教育現場にも大きな変化が求められています。個別最適な学びや協働的な学びの充実が強調され、子供たち一人一人の多様性を尊重する教育が進んでいます。

しかし、こうした変化の波に乗る一方で、私たちが忘れてはならないのが「不易」の部分、すなわち教育の本質です。教育の目的は、変えることのない人間形成です。礼節を重んじる心、人を思いやる気持ち、努力を重ねる姿勢などは、どれほど社会が変化しても根幹であり続けます。一方で、その実現のための「流行」、すなわち方法や手段は時代とともに進化し続けねばなりません。今、私たちの目の前にある教育課題を見渡したとき、この二つのバランスの重要性を改めて実感します。

現在、教育の世界では、ICT機器の活用や探究的な学びの推進が主流となっています。これらを有効に生かすには、教師自身が学び続ける姿勢をもち、柔軟に変化を受け入れることが求められます。「変えてはならないもの」と「変わり続けねばならないもの」。その見極めこそ、私たち教育者に課せられた使命だと感じます。

最後になりましたが、校務御多用の中、玉稿をお寄せいただきました先生方に感謝申し上げます。令和七年度も、原稿執筆依頼等への御協力、何とぞよろしくお願いいたします。

今井 誠 (天保山中)